

# 龍南會雜談第九拾一號

## 論 說

### 寬政異學の禁に就て

教授 本 田 弘

#### 序 論

熟々國史を按じて見るに、王仁が論語千字文を傳へてから、文は聖德太子に徇まり、詩は大友大津の二皇子に起つたと云つて善いが、吉備大臣が出てそれを弘め、嵯峨天皇が亦それを鼓舞致されたので、段々と大學の制とか科試の法とかいろいろな設備ができ、兎に角漢學は朝廷の學問となつたのである。そこで苟も立身を希ふ者は必ず漢學を修めんければいけぬとなり、従つて當時漢學者の輩出せしことは實に驚くべしで、かの日本書紀以下の六國史から、凌雲集經國集文華秀麗集本朝文粹に至るまで、殆んど目も眩むばかりである。が面白いことには此平安朝と異學の禁のあつた徳川時代とが正に好一對シムトウをなして居る。固より訓詁の學と性理の學とは品は變るが、考へて見ればどちらも中央政權の一地方から他地方に移つて制度習慣の大に改まる際に興り、亦どちらも其中央政權の衰ふるに伴うて衰へて居る。又其衰ふる時には、さちらも一時國學の華を咲かし、一方は鎌倉開府の基を爲し、一方は王政維新の礎を固めて居る。蓋し才媛一派の絢爛も、眞淵本居翁らの復古説も、前後職として、漢學の素養と、其反響とに由らざらばならず、と云つて置かう。人名にしても、平安朝で桑腹赤、淡三船、菅清公など書いてあれば、徳川時代にも物徂徠、紀平洲、柴栗山なん

と書いてある。此等は余り支那人の真似をし過ぎてゐる。さて國學に對して藩學があり、大學に對して弘文院後、昌平黌があり、勸學院淳和院等に對しては堀川學校懷德書院等があり、綜藝種智院などは寧ろ山崎流の源泉とも見られて、兎に角平安徳川兩時代の漢學の趨勢が似寄つて居る。

そこで此兩時代間の沿革を一寸述ぶるが順序である。藤原氏を經、平氏を經、鎌倉幕府の世となつては、何もかも武斷主義だから、延喜天曆の風は全く地を掃つて、學術の方面は一大衰微を來した。例の一種奇体の和漢混淆文が史乘傳記から公文達書に至るまで跋扈した。降つて南北統を争ふこと五十六年、天下漸く靜謐に歸すると思ひの外、再び應仁の活劇を演じ、所謂暗黒時代となり畢つた。其間に讀書作文のことは自ら禪僧の手に歸し義滿の成祖に書を贈る、義政の朝鮮に書に移す、若くは大内義弘が明に聘物を致す時など、假初にも文筆の用があれば、必ず禪僧の手をかつて用を濟ますことになつた。蓋し足利時代學問の淵藪は、京都及鎌倉の五山であつて、京都には王朝より、菅原清原の二儒家が一貫して存在しては居るものゝ、既に大に日本化してしまつて、新智識を有することは、如何にも入明の僧に劣らざるを得なかつた。是は現今外國留學で、學者の値打が上るのと同斷である。或は一般庶民の爲に學舎を建て、或は千思万慮學藝の書籍を刊行するなど、學問上の事業に於ては、實に凡て、僧侶を俟て初て成ると云ふ様な勢であつた。(徳川の初であるが、醒窓先生が、京都で經書を講せられた時に、五山の僧徒がきて、足利氏以來我徒に非れば書を講ずる事を得ず、と苦情を云つた。)こんな勢を有して居つた僧侶は、朱子の説く所は佛説に近しと云ふて、専ら朱子學を主張した。かの空華老人が作つた日工集に、新舊二義の説は屢々見ゆるが、例へば

○康歷三年九月二十二日義堂が義滿に謁する條に

君又曰、昨日儒學者講<sub>三</sub>孟子書、其義名々不<sub>レ</sub>同如何、余曰、所<sub>レ</sub>見不<sub>レ</sub>同也、近世儒書有<sub>三</sub>新舊二義、程朱等新義也、宋朝以來儒學者皆參<sub>三</sub>吾禪宗、二分發<sub>三</sub>明心地、故註書與<sub>三</sub>章句學<sub>一</sub>迥然別矣、四書盡<sub>三</sub>於朱晦庵<sub>一</sub>云々

○今年九月二十五日二條准后に逢へる條にも、

又見<sub>レ</sub>問、儒書新舊<sub>二</sub>學不<sub>レ</sub>同如何、曰、漢以來及唐儒者皆拘<sub>三</sub>章句<sub>一</sub>者也、朱儒乃理性遠、故釋義太高、其故何、則皆以<sub>レ</sub>參<sub>三</sub>吾禪<sub>一</sub>也

元來程朱の學は、佛説から出たものであるによつて、僧輩は大に喜んで、善哉々々と稱道し、將軍家以下にも勧めたものと見ゆる。則ち此頃からして既に漢唐の古義は衰へて、朱子の義の次第に盛になりし事を記憶せねばならぬ。

先是高倉天皇の御宇、清原頼業、宋の朱子と時を同ふして、中庸を別經として講すべき旨を稱道したけれども、それを傳承するものがなくて、とうとう朱子ばかり名を恣にしたが、鎌倉時代となつて、朱子の門人が師説を我邦に輸入し、南北朝時代の北畠玄慧を初め、其弟子であつたと云ふ親房卿など、この宋學を講究せられた。何書であつたか、今は忘れたが、南北朝に忠義名分の唱へられしは宋學預つて力あり」と内藤耻叟翁が云つて居られたのは、多分正説であらう。して見れば朱子の人心を支配せるとは、徳川氏に始まつたのではなくて、遠く南北朝に於て既に世間に流布して居たのである。しかも朝廷や幕府は、また之を公にする勇氣と暇とを持たなかつたものと見ゆる。

〔天文年間土佐に南村梅軒と云ふ人があつてなほ程朱窮理の學を唱へたと云つて居るがれども廣く行はれもしなかつたらしい〕

慶元偃武の後、家康は主として藤原醒窩を拔擢して經史其他諸子百家の書を講義させ、傍ら學校の

建設、文庫の創始、書籍の印行に務めた。書籍の印行には、古書の蒐集が必要である。そこで林道春や傳長老崇傳に命じて、普く公卿以下の家に就て舊記遺録を求めさせ、又五山の僧徒五十人をして、貴書珍本を寫させた。要するに亂後の經營其宜しきを得て、學問の曙光再び鮮かに、百花園中紅紫繽紛と云ふ風で、徳川時代に於ける文學は、史上未だ嘗て觀ざる盛況を呈するに至つた。當に外觀的でなく內的即ち精神的方面に於て異常の發達をなした。かの足利の暗黒時代に對照して殊に一層の光彩を放つた。人は明治の文明を觀て徒に西洋の賜となし、僅々三十餘年の歲月に於て、突如絶大の進歩をなしゝものゝ様に考ふるべきをも、これ未だ其一を知つて其二を知らざる皮想の考であつて、明治の文明は確かに徳川氏約三百年間に培養せられた結果否恩澤である。此恩澤あり此儒學的思想があつたが爲に、吾人は燦爛たる泰西文物の輸入に接して、毫も眩惑狼狽せず、漸次に採用することを得た譯である。蓋し家康の意見はこうであつたらう。足利氏が亂離の裡に滅んだのは、畢竟學問が缺乏して、人倫道德が地に墜ちたからである。そこで治世の術策は學問の獎勵に如くものではないと、こう思つたのであらう。然るに豈に圖らんや、此理想的治世策の實行は、他日徳川氏自ら倒るゝ所以の原因種子を、既に業に胚胎して居た。

家康は最初東夷に對して副將軍然たる水戸家を封じ、これで萬世安寧だと心得て居たが幕府排斥の聲は却て此方面から起つて、流石鐵壁と頼んで居た水戸の地は、尊王派の中心となり、大日本史を撰定して以來は水戸の學風は隱然幕府の敵となり、斯學の勢力は寧ろ政畧として振廻はさるゝに至つた。これ實に家康に取りては、豫想外であつたらう。

自由研究の思想は、はやく家康が明經博士船橋秀賢を抑へて、羅山を譽めた頃からして開けたが、

爾來學問は段々僧侶から離れたばかりでなく、堂上方から堂下即ち普通人民に落ちた。藤樹が出で、蕃山が出で、闇齊がい、順庵がい、朱舜水が歸化し、引て仁齋徂徠の二雄がでる頃になつては、復古學の潮流は其最頂に達し、勢は溢れて和學界に及んだ。歌に規則あり制限あることを攻撃したかの戸田茂睡の死は、實に仁齋の死を去ると僅かに二年であつた。契沖がい、長流ナガリが出で、春滿アヅマロが出で、眞淵宣長の二翁が相踵でいでられて、茲に古學は隱然たる大勢力を形作つた。東膺アツマロが常に門人を戒むる詞に「學びの道は天下の大道なれば已れ獨り立てらんが如く誇るべからず學ぶ人も師の教なりとて強ちに泥むべからず」とあり又眞淵の詞にも「後に善き考の出來たらんには必ずしも師説に違ふとてな憚りぞ」とあつて自由の觀念は日に増し盛んになつた。こんな風で、樂翁公の様な一代の名儒を以てすら學問の統一ができず、遂に尊王斥霸の言論が絶えきらなかつたのは是非もなき次第である。

## 時間美に就て

### 上、音樂美の主觀的觀察、

智識の二大門口。空間美と時間美。美の定義。假象論。客觀的實在の遊離。忘我。美感と實感。美の具象階級。音樂の具象性。音樂の無葛藤美と有葛藤美。

知識の二大門。吾人は吾人の外的知識の入口として二大門を有して居る、其一ツは目で他の一ツは耳である。目の攝する對象は空間と運動であつて、耳の對象は時間である。而して時間と空間と

園 田 春 耕